惹かれてゆく。さうしてデカダンな生活を味ひ乍らも少女の戀を忘れず、遂に思ひを告げる機會なく少女と別れてしまうといふ、ワルゲネフの書きさうな主人公の心持が可なり精細に描かれてゐます。但、この作の難を云へば主人公以外の性格描寫の不足です。作者の日記或は覺え帳としては精細な記錄ではあるが、小說としては前者と同じく少々物足らなさを感じます。

「島の住職」內容は短篇として恰好のものですが、文章が整うてゐません。殊に當字が多い。もう少し注意されたいと思ひます。

甚だ意に滿たない短評ですが、紙數にも限があるから個々の作品についてはこれ丈にとめて全体に就て一言添へて置きます。わかりきつた事を云ふやうですが文學は文によつて表はされた藝術ですからその中に盛らうとした思想、感情がどんなに美しいもの貴いものであるにしても、それを表現する文が拙いものであれば文學としての價値の少いものである事は申すまでもありますまい。だから作家が苦しむところは自己の思想感情を如何なる言語文章に如何に表現するかといふ點にあるべきだと思ひます。つまり作家は——畫家が線や色に對して然る如く——言語文章に對して他の何人よりも好感である可きはずだと思ひます。然も應募者諸君の原稿の多數は余りに言語文章に對して無頓着すぎたやうです。今後はどうか特に此點に充分の工夫洗練を加へられむ事を希望します。

（妄評多謝）

第二十九回記念式を迎へて龍南を歌ふ

佐々木高遠

茲に光あり力あり、來りて龍南の里を見ずや。
山を負ひ水に俯す自然の靈地。

松吹く風は千古に清く、草置く露は四時に美はし。
美はしく清き此の里、學び家に集へる健兒ぞ。
其の胸にたぎつ血潮は、ひたすらにたぎち流るゝ
白川にかゝる瀧なれ。
其の身ぬち燃ゆる炎は、しらぬひ筑紫の國。
大阿蘇の吐きけん火ぞや。
時は惟れ大正八年秋十月。
時潮漸く移り大勢既に新なり。
龍田山みんなみの野に、生れて茲に廿有餘九年。
高き理想に憧れつ、心靜に嘯きし。
健兒ぞ將に蹶起せん。
すめらぎの君が御國を、千代八千代搖がぬ巖と。
いや堅くいや強く固めなむ、いでや。
誤れる世のことごとく、濁りたる人のことごとく。
清めなむ健兒が責務、正さなむ健兒が覺悟。
あはれ時代改造の秋、天下の輿望を負ひてぞ起てる
龍南健兒の使命ぞ重き。
意氣は溢る狂瀾、熱血は迸る紅蓮の焰。
來りて龍南の里を見ずや、茲に光あり力あり。